



宮下孝吉先生の学問（宮下孝吉博士記念號）

山瀬，善一

(Citation)

国民経済雑誌, 110(3):99-116

(Issue Date)

1964-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00168064>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00168064>



宮下孝吉先生の学問

山 瀬 善 一

経済史学は、我が国において歴史学の分野でも広義の経済学の分野でも、敗戦後最も魅力ある学問の一つとなり、多くの研究者を惹きつけて来た。これはもとより、敗戦という事実が、これまでの学問に厳しい反省を要求したからである。特に社会・人文科学はその学問の性格上ともすれば歪められた国家政策を過度に支援するように変質されがちであった当然の帰結であろう。戦時中のかかる事情にありながらも我が国における経済史学の研究は、明治中期から大正にかけての黎明期を経て、次第に独立の学問として認められ、昭和初年頃には経済史専門の研究者が、その数を加えた。この具体的な現われとして社会経済史学会も昭和5年末に結成され、続いてその機関紙「社会経済史学」の発刊（昭和6年）を見るなどして着実に成長して来たのである。戦後の経済史学の開花は正にこのような土台の上になされたものといえよう。宮下先生はこの土台作りに貢献された一人である。我が国の経済史学が生誕した時代は、いまなお歴史派経済学者の経済史研究の一つの落し子経済発展段階説が強く支配していた。しかるに、ヨーロッパでは既に経済発展段階説は克服され、経済史学の新しい境地が開けていた時代である。このような時に、先生はヨーロッパに学び、特にオーストリアの経済史・制度史の巨匠アルフォンス・ドップシュの許で当時最も斬新な研究成果と手段を身につけて帰国され、我が国の社会経済史学会の創設に積極的に参画されたからである。学会創立の時に、最も年少の身を以て理事としての重責を荷われたことからこの事情を知ることが出来よう。

先生の経済史学への関心は旧神戸高等商業学校に入学の時から始まる。先生

は幾多の英才を我が国の経済学界に送り出された坂西由蔵先生の薫陶をうけ、経済史への開眼と学問への慎重な態度とを植つけられ、続いて東京商科大学に進まれた後は、我が国における経済学の創生期の泰斗福田徳三先生の門下生となった。この時既に先生の畢生の研究課題となっているヨーロッパ中世の都市研究に進むべき方向は明確に定められていたように思われる。福田先生のゼミナールでは「市場の理論的、歴史的ならびに政策的研究」を目指したが、そのうち先ず歴史的研究に重点をおくこととなり、都市市場の成立に関する法制的研究に進んだ。このことは福田先生自ら大正14年に出版された経済学全集・第一集(同文館)で次のように記している。「都市の発生に伴ひ都市に特有な政治組織スタットフェルファッスングが発生した。其起源に就ては未だ学者間に異論あるを免れず……」「近来(大正13—4年)予の研究室に於て宮下孝吉氏此問題を研究せり。其結果は他日公にするを期す。」(1166—7頁)これが処女論文「中世独逸都市制度の成立に関する研究」となって昭和2—3年に互って国民経済雑誌に掲載された。当時学界は刮目すべき業績としてこれを迎えたのである。この論文は都市成立に関するゾームの市場法説を解説するとともに、独自の研究を加味したもので、経済史は言うに及ばず、法制史への深い興味をも示された。これは福田徳三先生という最良の師を持ち、文化史への手ほどきを三浦新七先生からうけたという東京商科大学在学中における恵まれた研究生生活に加えて、先生自ら進んで当時既に東京帝国大学における中田薫先生の法制史の講義を熱心に聴講するなどして、諸方面に十分な基礎を身につけておられた賜なのである。

東京商科大学を卒えられると同時に、母校旧神戸高等商業学校の教壇に迎えられた。嘗て先生に学問への情熱を掻き立てた坂西先生は、不幸にも失明され、宮下先生は坂西先生の学問上の興味の中心をなしていた経済史の後継者として予定されたのである。最初に担当された講義はマーシャル、チャップマンの経済原論の外国書講読であった。このことは、先生の経済理論への理解を一段と明確ならしめるに役立ったことであろう。

先生が学生時代に精力的な学究生活を過ごされえた背後には、強健な身体の特長であったことも否定出来ないであろう。母校に教鞭をとられると間もなく徴兵検査において当時必ずしも数多くない甲種合格になり、一年志願兵として兵役に服し、ついで後に我が国が準戦時体制、臨戦体制へと移行するに及んで、昭和13年に学究生活を中断しなければならぬ結果になったのもこのことを物語っている。

二か年半（昭和3年3月—5年8月）に亙る文部省在外研究員としての先生の外遊生活は、明確な研究課題をひっさげての無駄なく充実したもので、先生に経済史学の方法論において、中世都市の研究においてヨーロッパの最新の成果を吸収せしめた。留学前マーシャル、チャップマンの書により工業の地方化に特別な興味を覚え、先ず産業革命史の影響をイギリスで約半年間実地に見聞して後に、先生は当時ヨーロッパ中世史学界の重鎮の一人であったウィーン大学のアルフォンス・ドップシュの門を叩いた。ドップシュの業績は、既に我が国においても植村清之助氏によって紹介され、ドップシュの許で研究された日本人には先生より先きに上原専録氏、村松恒一郎氏があり、後に城宝正治氏がある。第三人目の日本人として宮下先生も鹿島立ちを前にドップシュの許で研究することにさぞ胸を躍らしていたことであろう。いまやその望みが実現されるや、ドップシュの学風を最大限に身につけんとウィーンでの一か年半の落ち着いた学究生活が続いた。この間、先生はドップシュの「貨幣経済」と「実物経済」の立場を日本の貨幣史に適用され、ドイツ語で「日本貨幣史概説 Beiträge zur Japanischen Geldgeschichte」をドップシュのゼミナールの研究叢書の一冊として公刊した。当時としては比較的短期間の留学ではありながら、ヨーロッパの経済史学界の業績を摂取される一方、我が国のことについても一書を、それも自国語ならいざ知らず外国語でまとめられるという超人的努力をなされた。おそらくウィーンでの学究生活は先生にとり最も思い出深いものであり、この一書はウィーン大学否ヨーロッパの学界に先生の足跡を残すものとなるであろう。

帰朝された先生は、矢継早に外国での成果を発表した。学生時代からの先生の課題であったヨーロッパ中世都市に関する研究は、外遊中に一層の磨をかけられた実証史学の基礎に立って、益々実証的にも、概念的にも精緻なものとなった。ヨーロッパ中世都市を中心とした業績のみではない。我が国で経済史学の必要が認められながらも、まだその性格について混乱していた時期でもあった。先生がヨーロッパの学界の中で実際に見、そして実行された経済史学の学問としての方法並びに性格を明確に提示することは、この方面の研究が数少ない時だけに、学界に裨益するところ大であったと言わなければならない。

落着いた雰囲気の中で、研究はその分野を拡めつつ着実に深まって行った。それもやがて、日本のおかれた国際情勢の悪化と共に、遂に先生を研究室から引き離したのである。いまや一介の陸軍主計少尉としてバイヤス湾敵前上陸に参加し、生死の境をさまよった。研究にとり最悪の条件下にありながら、研究への情熱は豪も失われることがなかった。戦後バラバラに解きほぐされた専門書を手にして、軍務の余暇に読んだのだと述懐される先生のその眼には、研究への執念と逆境にもめげない強靱な意志とが感ぜられた。また、軍務それ自体においても、経済学者としての特技を買われ、陸軍糧秣本廠において研究的態度を保持することが出来た。後に先生の研究室の書棚の片隅には、可成りの嵩の反古が麻紐でゆわえられ、放置されてあったが、それは経理の軍務に服していた当時、先生自らがなした物動計画に関する調査資料で、いかにも経済史家として綿密な実証主義を貫徹されていたことと、資料への深い愛着とを物語るものであろう。しかし兎に角、軍務により一時的に研究活動を阻害されたという事実は、先生が常に心に描き、そして終始努力して来られた大学における研究活動の理想を考える時に、先生を一種のジレンマに陥いれせしめたようである。

敗戦という現実には、我が国民の進むべき途について全く新しい方向を与えた。当然学界もこれまでの研究方向について深い反省を迫られたのである。歴史学界において社会経済史が過度と思われるほどにさえ重要視され出したのもこの

時からである。或る研究者の中には、戦時中と戦後とは全く主張を正反対にするが如き、ややもすれば学問的節操を忘れたのではないかと思われる者さえ出る始末であった。傾向史的史風を強く戒めて来られた宮下先生は、戦時中の政治上の煽動にも、はたまた戦後のそれへの強き反動にも乗ぜられることなく、終始一貫して学問的良心を堅く守り通されたことは、学問研究者として真の道を堂々と歩まれたと言えよう。この態度は、先生の研究課題ならびに研究方法の一貫性に最も雄弁に見ることが出来る。ヨーロッパ中世都市をあくまで一生の仕事とされ、研究が深まるにつれてこれを中心に地域的にも、取扱事象においても拡大されて行った。研究方法も実証主義に徹底され、先生のどの研究成果をみても、過度の誇張を含まず実直そのもので、長期間の文献渉猟と深い思索の跡を認めることが出来る。

戦後間もない昭和21年から28年まで図書館長として、学制改革については準備委員として大学の行政面において既に重要な地位を占められていた先生は、殆んど毎日のように会議に追い廻された。戦後の社会的・経済的混乱、そして学制改革に基づく多難な大学行政は、ともすれば着意した研究を阻害しがちであった。それにも拘らず、先生は寸暇を惜しんで研究室に閉じ籠った。戦時中に蒙った研究の洪滞を一日も早く取戻そうとされていた当時の先生のエネルギーな研究活動は、図らずも助手として先生の研究室で研究活動を始めたばかりの私にとり、なにか圧倒されるような感じを覚えさせるほどのものであった。かくして、敗戦の痛手がいまなお完全には癒え終ってはいない昭和28年に、先生は学生時代以来一途に取り組んで来られたヨーロッパ中世都市の成立に関する研究を大成され、経済学博士の学位を獲得せられたのである。

その後の先生は、学内では二期(四か年)に亙る経済学部長としての、大学院研究科長としての、数度の評議員としての、そして学外では学会議員としての公務が待っていた。この面においても、先生は学者としての良心を堅持され、阿諛追従を避け、常に大学ならびに研究者の使命に照らして行動された。純理を完うし、軽はずみな妥協を知らない先生は、時には誤解を買い相手の気を害

なうことさえあったであろう。しかし、真に先生を知るものは、こういった先生の堅気な面を通じて自己の愚かさを知り、自己反省の機にしたこともしばしばである。

多忙な公務にありながら、研究の面も豪も劣えず、円熟した史観から我が国学界に嘗て見なかったほどの充実した「西洋経済史（古代・中世）」の綜観的な叙述を公刊される一方、近世経済史についても同種のを準備されていた。ヨーロッパの学界にも常に細心の注意を払い、その新しい成果や動向を研究にふんだんに採り入れ、次ぎ次ぎと適切な個別問題を学界に提示し、また終始一貫した史学本来の手法でその解明に努められた。その一部は、後に「西洋中世都市発達の諸問題」（昭和34年）としてまとめられた。先生は社会経済史学会創立以来理事として常に学界を導いて来られたのみならず、その研究成果は我が国でなしうヨーロッパ経済史研究の最高限のものであったと言ってもなら誇張ではなからう。学問研究において年齢を知らない先生の研究は、今後も若々しく学界の進むべき途を照らし続けることであろう。

二

前節において宮下先生の学問的生活の歩みを述べて来た。ここでは先生の経済史研究への態度について触れてみよう。先ず先生の理解せられる経済史学の性格を描く。ドイツにその源を発するロマン思潮の下に発達した歴史派経済学は、経済史学の成立に積極的役割を果たした。しかし、経済史叙述は歴史派経済学者によってなされず、統計学者であり、他方史学の教養を深く積んだカール・テオドル・フォン・イナマ=シュテルネック、ならびに文化史家カール・ランプレヒトによってなされた。経済史学の性格について先生は言う。「経済学か、それとも史学か、という二者択一の問題ではなく、経済学と而して史学という両者同時の問題である。経済史家は、一方において、史料の探索及び解釈について専門歴史家として欠くことの出来ない教養を積み、自ら研究する問題が一般史 (allgemeine Geschichte) の中で如何なる意味関連 (Sinnzusammenhang) を持っているかを把握していなければならぬ。他方において、経済史

家は経済的な諸勢力・諸傾向・諸可能性について可及的明白な表象を持つことを要し、経済学的な問題設定、その問題の關係する経済学的諸概念、統計的方法が、経済学とは無關係にそれ自体として使用して差支えなしと考えられ得る限りにおいて、利用し得るよう、それ等に通曉しておらねばならぬ。」（経済史学—その発達と性格—、三和書房、昭和27年、87—8頁）先生はここで述べられている歴史家としての教養と経済学者としての教養とを十分に身につけておられる。研究の出発点において福田先生の指導をうけ、特に歴史派経済学には専門研究者に匹敵するほどの深い造詣を持たれた。昭和23年5月15日の神戸経済大学創立第四十五周年記念講演には、「新歴史派経済学に就いて」のテーマの下に歴史派経済学についての先生の蘊蓄の一端を披露されたほどである。他方、史学の作法については、世界最初の経済史家と称せられるイナマ=シュテルネックを生んだウィーンの地で、しかも当時厳正な史料批判に基づく実証史学で次ぎ次ぎと学界の旧説を書き改めていたドップシュの許で、本格的な修練を積まれたのである。経済史に関する他人の報告、論文を評して時々経済学的センスと史学の作法の欠如を指摘されるのも、経済史家としての教養を十分に備えた先生には当然のことであろう。

先生がものされた恩師坂西先生への回顧文の中に、坂西先生の慎重な態度が強く述べられている。（書齋の窓、有斐閣、第37巻（昭和31年）、11頁）宮下先生も決して優るとも劣らざるほどの慎重型で、外遊中ドップシュの「世界史における貨幣経済と実物経済」の翻訳権をえられ、訳稿もとうの昔完成されているに拘らず、一言一句を慎重に吟味している間に活字にする機会を失っている。我々ならびに学生と外国書を講読する折など、単語一つも許がせにせず、徹底して吟味せられることも先生の指導を受けた者の良き戒めとなっていることだろう。この慎重な態度は、先生の発表された研究業績のことごとくに溢れ出ている。問題に取組まれるに際し、先生は先ず綿密な文献目録を作り、これまでの研究に十分な検討を加えられた上で、我が国で利用可能な最大限の史料、文献を基礎に研究にとりかかれる。思いつき、或いは筆勢にまかせたような無責任な文言

はなになんも見当らない。経済史の用語には特に細心な注意を払い、これまで研究された分野の専門用語はすべてカードに出所を附して書き写され、現在おそらく数万枚となってカード函に整理されている。これが先生自身の西洋経済史辞典となって直接役立っているのである。なんとか公刊して我が国学界の共有財産になる日の一日も早からんことを願うのは単に私のみであろうか。この種辞典が先生を含めた一部の人々により戦後間もなく企画され、かなりまで進捗していたと聞いているが、その後沙汰止みになっている現在なおさらである。

次に先生の研究における大きな特色の一つとして学説史的考察を挙げなければならない。これは研究態度の慎重さからも由来するが、他方学説史的考察の意義を十分に認められているからでもある。先生は言う。「経済史学が今日到達している学問的・実務的の業績・成果は、一時的な思潮のもとに、これを過大又は過小に評価してはならない。何となれば、経済史学の学問的関心と研究者の個人的興味とは、これを区別せねばならぬからである。」「研究者の個人的興味はその人格の中に存するものであるが、時代思潮の制約を受けている。人間は外界の環境の所産にすぎぬとのみ説かるべきでは勿論ないが、実際状態と時代思潮とは対応して変化し、この変化から均衡の破壊が齎らされる。均衡から均衡への安定に到達するまでの「過渡期」として、問題意識が生まれる。かくして、精神的状況から、研究者個人は、歴史の「新しい意味」を発見する。従って、歴史把握の仕方 (Auffassungsweise), それから生ずる学説が変動する。一つの時代に支配的学説が流行する。流行の学説が、一時代の一端から他の時代の他端へと、振子の如く振動する。旧学説が形をかえて、復活する。」その際、「人間という要素はコンスタントである。ただその相互關係が可変的であり、時代の変転の中で変化する。生活実践の中にくりかえされるものが存すると同時に、生活実践の一面は新しいものを創造する。従って、また、歴史観照も新しいものを認識するが、学説史の一面は、「くりかえし」を示しており、かくして、吾々に問題史 (Problemgeschichte) が提供される。研究対象の把握・認識目的に照しての研究方法的合目的性・問題設定の仕方を考察して、今日、如

何なる意味で「問題」となり得るか、その問題性を把握せねばならない。新しいとされる学説は、真に新しいのか、何故に新しい点があるかを明瞭にする必要がある。」(前掲著書, 98-9頁)学説史的考察の意義をこのように理解する先生は、御自身の研究のみならず、学生への研究指導においてもこれを実践に移される。ゼミナールで学生が報告する際、先生はきまって研究テーマの問題性を問いただされ、その研究に利用する書物の著者がどのような経歴の持主であるかを問題にされる。外国書にまだ馴染の浅い学生が、書物の内容にのみ関心を奪われ、著者の立場に完全に呑み込まれている状態であるのに対して、頂門の一針を加えられるのである。

次に事物の具体的把握についての先生の態度に一言触れなければならぬ。史学の認識は理論的判断ではなく、歴史的判断即ち時間と空間に制約された判断に基づいている。歴史研究においては時間の意識と空間の意識は片時も忽がせにすることは出来ない。しかるに研究対象が外国にある場合、時間の意識は兎も角として、空間の意識は往々忘れがちである。先生は研究上初めて出会う地名は、たとえそれが小村たりとも徹底的に調べ上げ、また学生への指導に際してもこの点について手厳しく追求される。ヨーロッパにおける史学が歴史地理と密接に結びついている実情を十分に認識されての態度である。このような事物の具体的把握については、地理的問題に限ったことではない。先生は抽象的な表現をされる場合にも、常に即物的な配慮が背後に潜んでいる。これは経済史家として当然なこととも言えるが、兎角都会で育ち、都会でなに不自由なく学んだ者、しかも見知らぬ土地を取扱う場合には特にザッハリッヒな物の考え方に欠ける者が意外に多い。先生は確かに浜名湖畔の北東に位置する余り大きくない田舎町で少年時代を過ごされ、材木商の長男として家業をつぐことを自他ともに認めていたが、長ずるに及んで家業をつぐことを断念し学問に専念した。先生は常に「誤って学者になった」と言われるが、「学問のための学問」に墮することの多い我が国の学界の余り好ましからざる傾向からして、先生の如き意味の「誤って学者になる」者が一人でも多く排出することが望ましいのではな

かろうか。こういった先生の生い育ちも、実際の経験を豊かに吸収し、学問を小手先の上手な小細工に終らしめず、現実生活の基礎の上に成り立たしめる一因になっているように思われる。

三

最後に宮下先生の経済史についての業績を振り返ってみよう。先生の研究分野は広範多岐に亙り、ただ単にその跡を辿るだけでも、若輩の私にとって並大抵のことではない。ましてや限られた紙面に、先生の学生時代を含めて40年を越える研究業績を纏めることは全くの不可能事である。十数年直接先生から指導を受けた者としての資格において若干の言葉を費したいと思う。

第一節で先生の研究関心の成長に少し触れているので、ここでは研究業績を通覧して認められる研究関心の分野を中心として述べよう。かかる見地からみるならば、先生の研究業績は大略次の諸分野に分類しうる。(1)ヨーロッパ中世都市の研究 (2)経済史学の学問的性格 (3)オーストリア経済史 (4)中世商工業史 (5)貨幣史 (6)教会・修道院の経済史における意義 そして最後に(7)経済史の綜観。いまこの分類に従って附言しよう。

(1)ヨーロッパ中世都市の研究 これは先生の研究関心の中心をなし、最も多くの論作がある。これらの論作から学位請求論文が出来上った。この論文を基としてまとめられた著書「ヨーロッパにおける都市の成立」(弘文堂,昭和28年)は、先生の30余年の研究の結晶ともいべきもので、我が国でなしうる外国史の最高の研究であると言っても過言ではなからう。この書物には先生の経済史学への研究態度のすべてが織り込まれており、先生でなければ書けない最も個性的なものである。二編よりなり、第一編には中世ドイツ都市の研究史が取扱われ、第二編には第一編で吟味された諸学説の妥当範囲を特定二都市の実証研究を通じて検討される。第一編は前述した学説史への先生の態度の見事な実践であり、「研究に及ぼした実際状態、当時の時代思潮、歴史叙述法の三者の影響」(前掲著書,13頁)を考慮して、当時乃至現在におけるそれぞれの研究の意

義が浮彫にされている。332頁に及ぶ叙述は、経済史がまだ法制史と混同して取扱われていた時代のアイヒホルンから今日までの約150年間の、主としてドイツではあるが、主要学説を網羅しており、これほどのボリュームと充実した内容を持ったものは、「現代のもつ（もちろんヨーロッパを含めて）唯一の本格的な研究史」（前掲著書への今来陸郎氏の書評、国民経済雑誌・第94巻第4号（昭和31年）、78頁）であることには間違いない。研究史の最後の節に表示された諸家の学説の系譜的図表は、その学説の主要部分によって系統づけられたもので、先生の研究史における成果の縮図であるといえよう。

中世都市の実質研究への態度について、先生はその研究の現在の在り方に関し次のように述べ、自らの立場を明らかにしておられる。「時代思潮を理解し、現代の時代思潮に囚われることなく、また、先人の真摯なる研究の意義を無視することなく、更にまた、単なる「理論」或は「型式」を当てはめて割切ることなく、しかも旧説の正しい部分を認めつつも、旧説に逆戻りすることなく、個々の、まとまった地方を地域別に研究し、諸都市の現実型を明らかにすることが、現代の都市研究の進歩状況からして、少なくとも一つの課題である。」（前掲著書、338—9頁）先生の中世都市の実質的研究はこの立場の適用であり、「ヨーロッパにおける都市の成立」の第二編には、それが立派に具現されている。ここで取扱われる二つの都市シュトラスブルクとラードルフツェルは中世都市、否中世文化全般を研究する上に最も重要な地位を占める地域の一つに位置している。従ってこの二都市の研究は単にそれらの都市の具体像を示すのみでなく、中世都市全般の成立過程の中心問題に解明の緒を与えるのである。先生は言う。「中世の二つの大きな都市地方——北イタリア及びセイヌとラインとの間の地域——は同時に中世都市文化の二つの主要類型を代表している。北西ヨーロッパ型の特徴は領主所在地と商人植民地との二元主義であり、イタリア型のキヴィタス一元主義に対立する。全ヨーロッパの発展のこの二つの主要類型は、硬直して隔離しつつ対立しているのではなく、いくえにも重なって影響し合っている。きわめて種類の異なった都市形成物はあの二大都市地方で互に関係させ

られて滲透し、新しい形態及び新しい地方が成立した。正にこの過程が中世都市の歴史なのである。」(“都市史研究の現状とその課題”, 国民経済雑誌・第 101 巻第 1 号(昭和 35 年), 86—7 頁)「地中海地方の都市風の生活が北方へ中部ヨーロッパに広がったのには二つの途があった。一つはローヌ・ソヌの通路でモーゼル及びラインの方向へ、他はアルプスの東端に沿う「琥珀通路」でアキレーヤからカルヌントゥムへと最初に前進し、後にアルプス諸峠を越え」(前掲論文, 87 頁)る途である。このような混合と感化とに最も重要な研究課題を置かれる先生にとって、シュトラスブルクとラードルフツェルとが取扱われたのは当然であると言えよう。シュトラスブルクの諸都市法, ラードルフツェルの市場文書の精緻な分析と、そこから結果する妥当な判断は、諸文献の慎重な援用と相俟って、「本邦西洋史学界の水準を抜く、余人の容易に企てえない」(前掲著書に対する今来陸郎氏の書評, 79 頁) 高度な専門研究を可能ならしめたのである。

著書「ヨーロッパにおける都市の成立」以後に進められた中世都市に関する諸研究は「西洋中世都市発達の諸問題」(一条書店, 昭和 34 年)にまとめられた。この書物は、第二次大戦後の西ヨーロッパの学界を十分にふまえての論究からなっている。第二次大戦中から後にかけてドイツ史学界は中世都市に関しハンス・プラーニッツとエディト・エンネンの二人の代表的業績を持った。近時北西ヨーロッパの中世都市の研究がドイツ、ベルギー、フランスの史家によって大きな関心を呼び起されて来ており、これらの二書も亦北西ヨーロッパの都市に多大の力点を置いている。先生の関心も逸速くこの方面に向けられ、都市的な中心地が古代のキヴィタスから抜け出して来る経過の法制的側面である都市共同体の形成の問題が、ヨーロッパ学界の論争と呼応して取挙げられた。北西ヨーロッパの都市を問題にする場合に、必ず考慮しなければならないケルンについて、都市共同体の在り方を明確にされ、プラーニッツが都市共同体と誓約団体を同一視するのに反して、誓約団体とは区別された地域団体の存在の意義を強調される。この点に関してはエンネンならびにシュタインバッハの見解と揆を一つにされるのである。また、中世都市に支配した「都市の空気は[人を]

自由ならしむ」(Stadtluft macht frei) という法諺の由来を究明され、この面からも「ゲヴェーレやアジュール又は誓約団体とかの特殊な孤立した一つの法律的根拠ではなく、社会動態的にのみ捕捉し得べき一般的諸事実のなかに求むべきである」(前掲著書、261頁)と主張し、かくて、安易ではあるがしかし無理な一面的解釈を排除せられる。中世都市は先生の中心的な研究関心だけあって、研究の深さにおいて、また広さにおいて測り知れないものがあり、その跡を詳しく辿るのは大海の深淵に陥ち込んだ感を抱かしめる。しかし、一言触れておかなければならないことがある。それは著書「ヨーロッパにおける都市の成立」の末尾に掲載された中世都市研究の文献目録である。1376項目が出版年代順に整然と集められておる。前述せる如く、研究に先立ち詳細な文献目録を作成することは、先生の研究態度の一つの特色をなし、これにより、先ず研究を進めるための軌道が敷設されるのである。一見廻り道のように思われるこのような準備作業こそ本格的な研究を目指す者の常に心掛くべきことではなからうか。勿論、研究者自身のためのみではなく、後の研究者への有益な手引を与えることは言うまでもない。先生が集められたほどの充実した中世都市の文献目録は、世界の学界でもその例稀で、今後この方面の研究を志す者にこよなき便益を与えてくれるだろうし、またこれを一瞥しただけでもいかに先生が中世都市の研究に打ち込んでおられるかの一斑を察知することが出来よう。

(2)経済史学の学問的性格 第一節で触れた如く、先生が留学から帰られた頃は、日本における経済史学の真価が学界で認められながらも、なお未整理の時代であって、この新しい学問の性格についてそれほど明確な基礎が出来上っていたようには思われない。帰朝後先生は本来の中世都市の研究と並行して、経済史学の性格を明らかにせんと努められた。その際、先生は二つの方向からの接近を試みられている。一つは経済史学がどのような発達過程を経て生誕したか。即ち経済史学の成立史の研究であり、他は経済史学の学問としての存在意義、効用、研究対象・方法を論理的に究明せんとしたものである。前者は後に「経済史学——その発達と性格——」(三和書房、昭和27年)の一書にまとめら

れた。この種の基本的研究は、我が国の学界では稀な試みであったし、まだ現在においてもそのユニークさを決して失ってはおらない。数年前、私は嘗てのケルン大学の経済史の正教授ルートヴィヒ・ボイティンの遺著となった「Einführung in die Wirtschaftsgeschichte」(Köln, 1958)を一読した時に、先生の抱かれ続けて来た経済史学の性格ならびにその研究方法がドイツ否ヨーロッパの経済史学界の主流と極めて近いものであることを改めて知ることが出来た。

(3) オーストリア経済史 嘗て落着いた研究生活を送られたウィーンの地は、特に先生にとって忘れえない親近感を抱かせておくことであろう。親しくその地に触れ、風物一つ一つに愛着を持たれているという先生の特殊事情に加えて、オーストリアは研究上から言っても一つの重要な地域をなしている。ドナウ河を通路として東方と、そしてまたブレンネル峠を越えてヴェネチア更には北イタリアと結びついており、フランク時代には辺境洲として、後には領域国家の形成を経て、ハプスブルク王朝の根拠地として、歴史上あらゆる角度から興味をそそる。上述の事情から、オーストリアへの先生の関心は、時代的にも事象的にも広範で、既に発表されたものだけを集めてもようにオーストリア経済史の一書が可能なほどである。

(4) 中世商工業史 中世都市の研究は、中世商工業の研究と密接に結びつけられて遂行されなければならないことは言うまでもない。特に中世都市は、生産都市としての経済的機能を果し、農村との分業関係の下に専ら商工業の営まれた場所であった。従って中世都市において史上初めて商工業者に十分な政治的権力が認められたのである。商業通路、商工業者の在り方、流通商品の性格、商工業の組織、これらすべては都市の立地はもとより政治的・社会的・経済的更には文化一般の機能、組織を決定づける場合が多かった。ドイツにおける中世都市の研究が、法制史の面から始まり、社会経済史の研究ならびに地誌の研究などを包摂しつつ発達して来た現在、これら諸方面からの総合的研究が要求されるのである。宮下先生は、中世都市の研究に法制史的研究と並行して常に中世商工業史の研究成果を盛り込んで来られた。この意味の商工業史の研究以

外に、先生にはこの分野において特記すべき二つの関心事がある。一つはユダヤ人の経済活動であり、他は次項で述べる貨幣史の問題である。

ユダヤ人の経済活動は、ヨーロッパの経済発展と関連して或いは過大に或いは過小に評価され、必ずしも十分な位置づけがなされていない。これはかれらがキリスト教徒にとっては異教徒であり、かれらの経済活動の実体を示すような史料に欠けることが多いため、流浪を余儀なくされた時代についてはなおさらである。また時には政治的問題と絡んで客観的評価を与えられなかったこともあったであろう。この種問題こそ宗教的にも、政治的にも比較的客観的立場で見ることが出来る我が国の学界あたりでもっと注意してもよかったのではないだろうか。こういった事情の中にあって、宮下先生はヨーロッパの経済的発展過程を考える場合、何時でもユダヤ人の経済活動を一項目として考慮に入れて来た極めて数少ない経済史家の一人である。先生の論文中ユダヤ人を直接取扱ったものは二篇であるとはいえ、ヨーロッパ経済史の綜観書「経済史」（三和書房、昭和26年）、「西洋経済史(古代・中世)」（三和書房、昭和32年）の中に、他の日本人によって書かれた綜観書に例をみないほどユダヤ人に言及されていることから、先生のユダヤ人への関心の深さを察知することが出来るであろう。

(5)貨幣史 貨幣史の問題は、経済史を取扱う場合、なにびとも突当る最初の、そしてまた見方によれば、最後の障壁である。この障壁を取除くことは、ヨーロッパで特別な歴史補助学（泉貨学又は古銭学）が早くから発達したほどの複雑な手間のかかる、そして地味な仕事に属する。宮下先生は研究の当初からこの問題に興味を寄せられ、留学中にはウィーン泉貨学会で日本の「王朝時代の貨幣史」を発表になり、これを基にしてドイツ語の著書「日本貨幣史概説」を処女出版されたことは既に述べた。この著書の中では、出版当時までの我が国の貨幣制度にまで及んでいるが、重点は王朝時代にあり、恩師ドップシュのカロリング時代の貨幣経済的発展の構想を日本において検証せんとしている。ここでは比較的簡潔に取扱われている徳川時代については、神戸大学教授としての最後の執筆「徳川時代における貨幣経済 “Money Economy” in the Tokugawa

Era」(Kobe University Economic Review, No. 8(1962), pp.1-19) によって補完がなされ、貨幣史についての先生の立場を通して我が国の貨幣史の研究成果を批判的に取扱いながら海外に紹介され、学术交流の一つの役割を果された。

先生の日本経済史への関心は、日本貨幣史への貢献のみではなく、日本経済史一般にも常に意を配られ、この方面の講義ならびに学生の研究指導にも当たられていた。日本経済史の特色は、彼我の事情に通じている者によってこそ最も適格に把握出来ることは言うまでもない。ヨーロッパ経済史に特に明るい先生の日本経済史についての発言には、日本経済史のみに専念している者とは異なった味を認めることが出来よう。

日本貨幣史への上述の先生の寄与は、ヨーロッパ貨幣史への深い造詣を基礎にしている。ヨーロッパについては、この面の独立の論文がないとはいえ、機会ある毎に貨幣史に言及され、我が国の社会経済史学界においても先生と貨幣史との関係は既に定評がある位である。先生の最初の綜観書「経済史」に与えられた書評に「古代、中世、近世初頭のヨーロッパ各地の貨幣制度について述べられるところ極めて綿密であり、……貨幣単位の検討は肝要であることを知りながら甚だ煩わしい問題のためにこれに触れることを避ける傾向が一般に多いことから見て、本書の……記述は有用であることを疑わない」(「経済史」に対する高村象平氏の書評、社会経済史学・第18巻第1号(昭和27年), 103頁) と述べられているのもまた当然である。

(6) 教会・修道院の経済史における意義 中世史家にとってキリスト教ならびにその諸制度の理解は必要欠くべからざるものであることは贅言を用しない。経済史を取扱う場合においても矢張り同じことが言える。中世の世俗人の生活は聖職者の生活となんらかの形で結びつき、宗教的諸施設の経済的営みは中世経済全体の重要な部門であった。しかも神の使者としての聖職者は世俗人の精神的教師であると共に、知識人として彼等が作り出した諸制度は世俗人の手本ともなった。宗教的諸施設の土地経営については、これまで経済史家の大いに取扱うところであったが、その活動の根源にまで遡って修道院の会則、ブルー

ダーシャフト、財政などを考察することは、キリスト教に関する特殊な知識を必要とするため、誰しも容易になしえない。宮下先生は常にこの方面に関心を寄せて来られたが、特にここ数年教会・修道院の単に経済的営みのみならず、この営みを支配する諸制度およびその理念にまで突き進んで理解せんと努められている。これは一層深いところから経済史を捉えんとするもので、先生の研究が既に円熟の境地に到達していることを十分に感ぜさせる。

以上、先生の研究関心の分野を中心に項目別に述べて来た。史家は個別研究と並んで絶えず綜観の仕事に従事する。最後に宮下先生のこの面の業績に眼を移そう。

(7) 経済史の綜観 先生による経済史綜観書を持たんとする早くから存在した学界の期待は、先生の慎重さのため、昭和26年の「経済史」の出版まで待たねばならなかった。昭和32年には前著の古代、中世にかかわる部分に徹底的な増訂を施され、極めて詳細な文献目録と索引とを加えて、この古代、中世の部分だけで既に前著の頁数を大巾に超過する大著「西洋経済史(古代・中世)」を学界に送り出した。両著は体裁において殆んど別著をなすが、先生の西洋経済史についての一貫した史観が、両著を通じて見事に具現されている。時代区分において、先史時代から13世紀まで、13世紀から産業革命まで、産業革命以後という三大時期に分け、各期に準備時代として11・12世紀、16・17世紀を設けて考察すべきことを主張する。各期を通じて一貫した人間性を認め、他方各時代にはその時代なりに解決して行くべきその時代の課した政治問題があり、この面については時代感覚を以て各時代の政策を把握せねばならぬとされる。従って、歴史の変遷を同一の生命の不断の連続として見るか、或いはこれを刻々に新たな生命の続出として考えるかは、要するに史的事象の有する両面性のいずれかに即した結果にほかならない。「歴史は飛躍せず」との立場を堅持され、説くところ極めて親切に、諸学説が並存する事象については独断的に決定することを極力避け、諸説の要旨を紹介し、問題の在りかたを明らかにした後、自説を附記される。ために各項目それぞれが独立の専門論文としての十分な価値

を持つものであり、さればといって綜観書の必要条件である全体の均衡を失ってはおらない。綜観をなすに当って如何に慎重な態度で臨まれたかを昭和26年の「経済史」の序文の一節は次のように伝えている。「諸家の研究成果を受け容れるに当って、私は過去四半世紀に亙って、次のやうな過程を経た。一つの書物を読んで、なる程と考へた。他の著作を看て疑問が起つた。更に、別の論著を仔細に参照して、一層、疑問が湧いて来た。可能な限り原典にも接して見た。自ら氷解したやうな気がした。しかし、判らぬ箇所は依然解決されぬ。そこで、考察を施さねばならなかつた。しかし、この場合、歴史的事実を無理に割切らうとしなかつた。それは歴史的現実態に忠実ならんと希ふためである。便利な自動車や飛行機に乗らうとは欲しない旅人は、この書において、牛歩、意図する目的地にまだ到達してゐない。」この言葉は吾々の如きこの道に志す後輩にとってよき戒めとなるであらう。「西洋経済史(古代・中世)」は、我が国における最も高度な綜観書の一つであることに誰人も異論はないであらう。希わくは、一日も早く先生の史観を貫徹された続編「西洋経済史(近世・現代)」の出版を期待したいものである。

これまで三節に亙って宮下孝吉先生の学問について述べて来た。先生の学問的楼閣の一角さえ、未熟な私にとって理解しえたとは思わない。ただ、前にも述べた如く、十数年の間先生の許で指導を受けた者として雑文を綴つた次第であり、先生の御意を誤つて理解した多くの点があるのではないかと怖れている。最後に、御健康で、円熟した輝かしい業績を今後も相変らず我が国の経済史学界にお示し下され、我々を御指導賜らんことを。